

# THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 51

2004年11月

## Special to the Newsletter

### マリアテギとリマ・スキャンダル——マリアテギの足跡を尋ねて——

辻 豊治

7年ぶりに中南米を、メキシコ、ペルー、ボリビアの順に旅行した。今回の旅行目的のひとつは、ペルーの思想家マリアテギに関わり、リマでの彼の足跡を辿ることであった。マリアテギはすでに日本で2冊の翻訳書と1冊の研究書が出版され、さまざまな著述のなかで言及されているので、改めて紹介する必要はないであろう。ただ一言、マリアテギを評するとすれば、「あらゆる領域での前衛を担ったラテンアメリカを代表するマルクス主義思想家、批評家」ということになろう。マリアテギの生涯は研究上、およそ次の3つの時期に分けられる。①幼青年期(1894-1919年)、②ヨーロッパ時代(1919-23年)、③成熟期(1923-30年)。

マリアテギは15歳から新聞社で、当初は下働きをしていたが、しだいにその才能を発揮して編集に携わり、やがてペルーの有力紙『エル・ティエンポ』紙で「声」という文化、祝祭、社会風刺をテーマとするコラムを担当するまでになった。当時のペルーは19世紀的な社会経済構造に対する異議申し立ての動きがまず、思想、言論、文学などの分野で現れ、労働組合、学生、都市民衆が政治運動の場で発言力を増し、また先住民の悲惨な現状が問題視される状況にあった。こうした動きにマリアテギの感性が無関心であるはずはなかった。1918年には社会主義を標榜する雑誌『ヌエストラ・エポカ』誌を創刊した。この雑誌は『エル・ティエンポ』紙の印刷所を利用して発行したが、創刊号での軍備拡張を批判するマリアテギの記事が将校グループによる編集部襲撃事件を引き起した。この結果、印刷所の使用が拒絶され、雑誌は2号で廃刊となった。この事件をめぐる編集部内で対立が起こり、1919年にマリアテギは、同僚のセサル・ファルコンとともに『エル・ティエンポ』紙を退社して、『ラ・ラソン』紙を創刊した。1919年は賃上げと8時間労働を求める労働運動が激化し、サンマルコス大学での大学改革運動が高揚した年であった。この年に最初の労働組合であるペルー地域労働連盟が結成されている。マリアテギはこうした潮流を側面から擁護する論陣を張るとともに、「社会主義普及委員会」を創設した。このようなペルー社会の転換期はマリアテギにとっての転換期でもあった。

この時期、マリアテギにまつわる有名なエピソードがある。それは1917年11月5日にマリアテギとその友人たちが、スイスのモダンダンサー、ノルカ・ルースカヤによるリマ共同墓地で行った深夜のダンス・パフォーマンスである。ルースカヤはモダンバレエの創始者イサドラ・ダンカンの次世代に属し、スペインのトルトラ・バレンシア、アルゼンチンのアントニア・メルセなど同世代のダンサーで、彼女らに次いで1917年10月18日にリマに到着し、市立劇場とコロソ劇場で公演した。プログラムは第1部が彼女によるヴァイオリン演奏、第1部が舞踏になっている。彼女は幼いときから、ヴァイオリン、ピアノに才能を発揮したが、当時、全盛期にあったロシアのバレエにあこがれ、ステージネームもロシア名を使った。ノルカ・ルースカヤは「ロシアの肌」を意味する。ここで注目すべきは第1部の舞踏の部でショパンの葬送行進曲が入っていることである。マリアテギは『エル・ティエンポ』紙記者として宿舎となったマウリイ・ホテルで彼女にインタビューするなど親交を深め、ペルーを離れてからもニューオーリンズからマリアテギにプロマイド写真とともに礼状を送っている。事件の経緯は次のようなものである。11月4日の夜、千秋楽を無事終えたノルカとその母親を囲んでマリアテギ、ファルコンおよびアブラハム・バルデロマルといった記者たちがホテルの彼女の部屋に集まり、打ち上げパーティを開いていたが、このとき墓場見学の話が出、急遽、墓地の管理人に対して見学許可の手続きを行い、一行は車でリマの北にある共同墓地に向かった。ヴァイオリニストも同行しているところから、公演で踊った葬送行進曲をそこで再現しようとしたと思われる。この深夜のダンスの様子は次のように描かれている。

「深夜1時前に一行、墓地に到着。厳粛な祈りの姿勢。2人が灯りをもって道を照らす。深い嘆きのポーズで跪く。墓地の彫刻と一体になる。数秒、大地にひれ伏し、すべてが静謐と厳かな祈りに誰一人、身動き一つしなかった。やがて立ち上がり、涙を流した。全員、彼女の傍にかけ寄り、声もなく周りを囲んだ。母親はシルクの黒いマントを着せ掛けた。警官が来るまえに、墓地を去った」。

この深夜のダンスは、警察による逮捕、知事による事情聴取、拘置所送致となり、他の新聞からは聖域への冒瀆、悪趣味などと攻撃・批判された。結局、マリアテギと記者たちは1日、ノルカと母親は2日間、拘置所に拘束された。事件の余波としてマリアテギは新聞記者クラブ副会長を辞任、擁護した会長も引責辞任した。また、マリアテギの許婚で上流階級の子女であるファニータとも別れることとなった。

この事件について従来の解釈は、ボヘミアンを気取りデカダンスを意識していた青年期にありがちな伝統社会への反抗や反発にもとづくというものであったが、近年、マリアテギと宗教、神話、神秘主義の関係が問題にされるなかで、新しい解釈が現れてきている。マリアテギ自身の弁明においても敬虔で聖なる芸術的行為であり、ダンスと宗教のつながりを強調し、パリの墓地でのダンカンの舞踊、教会祭壇でのバレンシアによるジプシーの踊りを例に挙げているとおり、この流れは現在においてフロレス・ガリンドやウィリアム・スタインに

代表され、伝統社会への反抗の意味よりもむしろ宗教的で神秘主義的なマリアテギの心性を象徴するものとした。案外、即興的なパフォーマンスだったかもしれないが、この事件以後、マリアテギの文筆活動は、芸術評論から政治評論にその比重を移していった。時あたかも11月7日、ペトログラートの冬宮が革命軍に占拠され、10月（ロシア暦）革命が成った。時代は急展開していく。この事件は、マリアテギにまつわる単なる青年期のエピソードではなく、マリアテギの思想的発展や思想の特質を知る手がかりとなる奥行きをもつ。

リマではこの事件の足跡を求めて、マリアテギのリマでの旧居、共同墓地、マウリイ・ホテル、市立劇場、コロソ劇場を訪れた。旧居はセントロに近い下町、ワシントン通り1946番地にあり、現在はマリアテギ博物館となっている。共同墓地は主に、大統領、政治家、実業家、文化人、戦没兵士が葬られており、墓は大理石の壮麗な霊廟であったり、彫刻であったりする。パフォーマンスの舞台はペルーの最も重要な大統領であるラモン・カスティリャの墓の前に広がる中央通路である。マリアテギの墓は自然の岩を墓標として夫人の墓とともに、この墓地の片隅に置かれている。

最後にメキシコとこの事件の関わりを述べておこう。リマ・スキャンダル翌年、1918年にノルカ・ルースカヤはルイス・ペドロ監督のメキシコ映画『サンタ』にダンサーとして出演している。事前にUNAMのフィルム・ライブラリー（Filmoteca UNAM）に所蔵されていることは調べがついていた。『サンタ』は当時のフェデリーコ・ガンボアのベストセラー小説の映画化であり、哀れな女性の転落の末路が描かれ、メキシコ人の機微に触れる筋立てとして以後3回リメイクされている。この映画は3部構成で各部の冒頭に彼女が「清純、悪徳、受難」を踊りで表現するものである。入手したものはその中の第2部にあたる部分で彼女の登場時間はわずか13秒であった。リマ・スキャンダルの当事者の映像が残っていること自体、奇跡的なことである。この『サンタ』はメキシコ革命まだ冷めやらぬ1918年という時期に制作されたことや制作の経緯など映画そのものについても興味は尽きない。マリアテギの足跡を追ってメキシコまでやって来たが、マリアテギ研究は奥深く、さまざまな世界との出会いを経験させてくれる。

\* 本稿は2004年10月9日の『ラス・アメリカス研究会』の報告をまとめたものである。

#### 参考文献

- ① William W. Stein. *Mariátegui y Norka Rouskaya*. Lima: Biblioteca Amauta, 1989.
- ② William W. Stein. *Dance in the Cemetery: José Carlos Mariátegui and the Lima Scandal of 1917*. Oxford: American University Press, 1997.
- ③ 今井圭子編『ラテンアメリカ開発の思想』日本経済評論社、2004年。

（京都外国語大学教授）

## 文学の中のアメリカ生活誌(40)

**Hobo and Bread line (渡り者の労働者とパン行列)** 1881年から20年間、アメリカでは600万以上の労働者を巻き込み、2,378回ものストライキが行われた。だが、こうしたストライキは警察力を増大させ、多くの失業者を生みだしただけで、労働者にとって得たものは何もなかった。1894年のニューヨーク市長の報告によれば、繰り返されるストと不況によって、その年のホームレスと失業者の数は、2万人にのぼった。彼等が衣食住のために集まる場所は、大都市のskid row (どや街、ニューヨークでよく知られたどや街は、バワリー街)にある安宿だったが、なかには近くの公園を不法占拠する者もいた。Nels Andersonによれば、ホームレスには3つのタイプがある。すなわち、hobo, tramp, bumである。働いては放浪するという意味のhoboが初めて使われたのは、1889年のワシントン州の土地の新聞のなかであった。語源ははっきりしないが、語源学者が立てているいくつかの仮説を挙げる。1つは1880年代の放浪者たちの挨拶の言葉“Ho, boy!”(「ホーボーイ」)からきたのではないかというもの、2つは帰途中という意味のhomeward boundを縮めたものという説だ。

1894年2月、作家Stephen Craneはtramp(浮浪者)に扮してどやの安宿で一晩を過ごし、その悲惨な光景を*An Experiment in Misery*のなかでこう描いている。「男たちは死んだように一言も口をきかずに横になっているか、突き刺された魚のように、たえぎそうに胸をふくらませたり、荒々しく鼻息を息を吹き出していた」。

こうした暗さを増してゆく経済的及び社会的情勢は多くの社会主義者や労働組合の怒りがあった。1893年の秋には、労働組合や慈善団体によってsoup kitchen(無料給食施設)がつけられ、食べ物が集められ、さらにまたニューヨーク市のユニオン・スクエアではハンガーデモが行われた。soup lineとは給食施設の前に並ぶ困窮者の列のことで、この語がアメリカで最初に使われたのは1851年である。

ビジネスマンのなかにも、意気消沈した都市の隣人を元気づけ、地域社会の真の連帯感をつくりだすために手をかす者がいた。ニューヨークでも指折りの雇用主ドイツ系のNathan Strausは、倉庫に保管していた燃料と食料品に、原価より安い値札(どれをとっても5セント)をつけて売った。また彼は一晩5セントで宿泊できる慈善宿泊所や5セントの食事を提供するレストランを作った。酵母メーカーのLouis Freischmannは、ブロードウェイのグレイス・チャーチの近くにあった店で昼間はロールパンとコーヒーを売っていたが、夜になると店に来るすべての客に食パン3分の1個を無料で配りつづけた。こうしてパン屋が配るパンを求めて、その店の前に並ぶ行列を指すbread line(パン行列)という表現が生まれたのである。Stephen Craneも*Men in the Storm*の執筆中、吹雪にも拘わらずそんな行列に加わったことがあった。次はEarskine Caldwellの*Some American People*(1935)のなかにあった用例である。「社会はこの頃、パン行列を嫌っている。しかし、社会は、自分のパンを十分持っている人々の社会である」。前記のように、どや街や公園で共生していたホームレスたちにはhobの他trampとbumというタイプがあった。働こうとしない放浪者を指すtrampがアメリカ英語として初めて用いられたのは、1880年代である。働けない放浪者という意味のbumのほうは、ドイツ語のろくでなしbummlerが語源らしい。

**Hot Dog (ホット・ドッグ)** アメリカでは、ソーセージはホット・ドッグと呼ばれる前には wiener (ウインナー・ソーセージ) と呼ばれ、やや俗語的には wienie と言われていた。この wiener という語は、frankfurter (フランクフルト・ソーセージ) の意味で使われることがよくあった。いうまでもなく、Wiener と frankfurter という語は、ドイツの地名つまりウィーンとフランクフルトをその呼び名の起源にしている。

一説によると、フランクフルト・ソーセージは、フランクフルトからの移民によって初めてアメリカに持ち込まれたと言う。もう少し言うと 1880 年に、Anthony Feuchtwanger というババリア人が、セントルイスで熱いソーセージとそれをパンにはさんだものを frankfurter と呼び、やけどしないように白い手袋をつけて売ったのがその始まりだという。別の説は、ドイツ移民の Charles Feltman というコニーアイランドのパン屋が 19 世紀の終わり頃、ソーセージをはさんだサンドイッチを frankfurter と言って、自分の店で売ったことに因むというものだ。ともあれ、この食べ物が広まったのは、コニーアイランドのほうだったので、今ではこの地がこの俗語の発祥地とされている。20 世紀にはいると、焼きはまぐりに代わってホット・ドッグがコニーアイランドの名物になるが、この海辺リゾートの露店で初めてこの食べ物を見たニューヨーカーたちの印象は、「ロールパンの間にはさまれた気味の悪いソーセージ」だった。ついでにいうと、Feltman の店で働いていた Narhan Handwaker は、1916 年退職し、ナサンズ・フェイマス・インコーポレーションを設立、現在これが米国でもっとも大きなホット・ドッグ会社だ。

コニーアイランド名物の frankfurter という名のこの食べ物は、一時 red hot と呼ばれたことがあった。ニューヨークのボロ球場に食料品店を持っていた Harry M. Steven は、1886 年のある寒い日にソーセージの赤い色とあつあつの意味をひっかけて「レッドホット、レッドホットはいかがですか」と呼ぶように売り子に命じ、red hot という呼び名を一躍有名にしたのである。ロールパンを熱熱し、ソーセージをスパイスで調味することを考えたのも Steven だった。だが、ソーセージがホット・ドッグとなるまでには、さらに数年を要した。

ホット・ドッグは 1896 年から英語の語彙として記録されているけれども、当時は「すぐれた」、「熟練した」という意味で用いられていた。「最高」のソーセージ・サンドイッチという意味の食用のホット・ドッグが初めて活字になるのは、1906 年、人気漫画家の T. A. Dorgan が細長いパンのなかにソーセージの代わりにドイツ産のダックスフンド犬が入ってる絵を描き、これに hot dog という名をつけてからである。これにはソーセージが犬の肉でできているのではないかという不愉快な憶測が広がっていたのに助けられた面もある。Dorgan の風刺漫画に激怒したコニーアイランドの商工会議所は、1913 年に会員であるホットドッグ屋にこの名称の使用を禁じる条例を可決した。しかし、時の大統領 Franklyn Delano Roosevelt と訪米中であつた英国王 George VI および王妃 (現在の Elizabeth 女王) がこの食べ物を試食したことで、同商工会議所は 1939 年までにその条例を撤廃することにした。次は Sinclair Louis の *Young Man Axelbrod* の中の一節である。「カヌートは古本屋で (中略) 『不思議の国のアリス』を見つけ、家に持って帰り、昼食のホット・ドッグ・サンドイッチをかじりながら読んだ。」

(新井正一郎・天理大学国際文化学部教授)

## Research

## ブラジルに生きる沖縄系日系人とエスニック・アイデンティティ——アララクアラの事例——

本発表は、パウリスタ州立大学アララクワラ校大学院社会学部で研究した修士論文の一部要約である。

研究目的は、アララクワラ市に定着した沖縄系一家族のライフストーリーを通して、エスニック・アイデンティティの構成プロセスを把握し、日本人の二重性を明らかにすることであった。

ブラジルへの日本人移民者に関しては、社会科学、文化人類学、歴史学、人文地理学などの分野で、様々な研究者達が、日本人移民者達のマジョリティー社会への統合プロセスを考察している。しかしながら、それらの研究論文の殆どが、同化論を基に分析されたものであり、同化論の見解とは全く違うエスニシティ論を通して分析された論文は非常に少ない。

同化論の見解では、マジョリティー社会の観点から民族間の関係を分析されている為、「分離」或いは「除外」といった否定的な観点からの分析傾向になることを避けられない。したがって同化論は、エスニック・グループがマジョリティーグループへと吸収され、マイノリティーグループが消滅することを推測した論理となる。

その論理は、20世紀初めにアメリカ合衆国で生まれた“Melting pot”論によって影響された見解であるにもかかわらず、エスニック・グループが消滅していない。反対に、様々な国々で、伝統文化や価値観などシンボリック的な文化継承を試みようとする新たな現象として、エスニック・アイデンティティを再認識する動きが見え始めてきた。

エスニシティ概念は、同化論を基に研究する学者たちの見解に反論し、同一民族性の観点からではなく、異種混合性といった観点から、民族関係のある一面を我々に見せてくれる概念である。この概念で一番重要な点は、エスニック・アイデンティティは、マジョリティー社会との関係において構築、或いは再構築され続けるということである。

## アララクアラの事例

明治維新が始まった1868年まで、沖縄は琉球と呼ばれる独立国家であった。しかし、1879年にその小さな群島は、日本の一県として統合され、日本政府と天皇への忠誠心の育成といった同化政策が行われた事は周知の通りである。

その同化政策が始まって約30年後の1908年にはブラジルへの日本移民が始まり、以来ブラジルの地において、内地系移民者と沖縄系移民者という日本人の二重性が現れ始めることになる。第二次世界大戦までは、沖縄県人移民者は内地系移民

者と比べて、地理的に集中する傾向が強かったにもかかわらず、当時の日本政府とブラジル政府の同化政策により抑制され、彼等独自の文化や価値観(沖縄性)が表面化することがあまり無かった。

しかし、現在、沖縄系人は、独自のコミュニティを形成し、「外人」や内地系日系人と沖縄系日系人との文化的境界線の標識である琉球民謡「三味線・踊り」や沖縄独自の価値観「イチャレバ・チョーデー」「ユイマール」などを復興し継承してきている。人類学者の森幸一によれば、戦後日系社会内部での沖縄県人に対する差別が弱まりにより、沖縄的なモノの否定から、むしろ肯定的に沖縄性を認め、プラスの評価が生まれた。したがって、戦前に表面化されることがなかった沖縄的アイデンティティが現れてきたと述べている。

事実、アララクアラにおいても、こうしたエスニシティ現象が見られようになってきた。その一つに、ブラジル沖縄県人会本部の影響により沖縄的文化を守ろうとする活動が活発になりつつある。例えば、沖縄独特の「三味線・踊り」が、若い世代の3世、4世を主体に積極的に行われるようになってきている。又、そうした沖縄独特の「三味線・踊り」を、本土系の日系人のイベント(日本人会など)や市のイベントで大々的に公表されるようになってきている。そして、「イチャレバ・チョーデー」等、沖縄独特の価値観をアララクアラ沖縄会館に通う若者へ教え伝えようとする動きがでてきた。

2世、3世、そして4世であっても、沖縄会館に通う若者達は、本土系の文化とは違う、沖縄独特の「三味線・踊り」をすることによって内地系の文化との相違性を認識し、内地系と文化的差異化が生じている

そうした動きの中、沖縄県人会組織が1996年にアララクアラ日本人会から独立して、アララクアラ市に正式に登録された。その結果、アララクアラ市の日系コミュニティには、沖縄会館と日本人会の二つの日系人組織ができ、現在では、アララクアラの沖縄系人は沖縄会館と日本人会の双方の組織に通い、双方の組織に帰属することを好んでいる。

森幸一によれば、こうした沖縄系人に見られる二重のポジショニングは、沖縄系人のアイデンティティの表れであると述べている。つまり、日系人でもあり沖縄系人でもあるということである。彼らは、「時」や「場所」や「状況」など、コンテキストに応じてブラジル人になり、日系人になり、そして沖縄系人になるのである。したがって、アララクアラの沖縄系人は、日本人でもない、日本の沖縄人でもない、ブラジルの沖縄系日系人のエスニック・アイデンティティが構築されてきているといえるだろう。

木村秀之(天理教海外部)

## Essay

## 日本人とアフリカ系アメリカ人——その歴史的関係をめぐる本を刊行して——

筆者（元・オハイオ大学講師）は2004年6月、古川博巳（元・天理大学教授）との共著で『日本人とアフリカ系アメリカ人——日米関係史におけるその諸相』（明石書店、553ページ）を刊行した。ほぼ15年にわたる日米での共同研究の成果である。既出の論文に加筆修正したところもあるが、基本的にはそれぞれが分担を決めて書き下ろした後、一字一句にいたるまで議論した、父子による文字通りの「共著」である。本書テーマに関する著者ふたりの想いや執筆動機は、16ページにわたる破格の長さの「あとがき」に記した。とくに1927年生まれですでに喜寿を迎えた古川博巳は、すぐれぬ健康状態を抱えながらも、みずからの戦前・戦後の体験や半世紀以上にわたる研究蓄積を次の世代に伝えることを意図して執筆した。

『日本人とアフリカ系アメリカ人』は3部構成である。第1部は「近世における日本人の〈黒人〉見聞」であり、16世紀の日本人とアフリカ黒人との出会いを論じた後、日本の文献に見る黒人記述や呼称に言及した。これは、現在まで続く日本人の黒人観の源流が、その時期に求められることを示すためであった。18世紀末にはアフリカ系アメリカ人との出会いが始まり、捕鯨船が日本近海に現われ、黒人操舵手と救助された日本人海難者などが交流を持つことがあった。ペリ——行の黒船にも黒人たちが乗り込んでいた。

第2部は「幕末期より第二次世界大戦期まで」である。幕末から第二次大戦にかけて渡米した日本人とアフリカ系アメリカ人との係わりを論じ、来日したアフリカ系アメリカ人の政治家や文人などの日本体験を紹介した。文化面では、日本におけるジャズを受容、野球をはじめスポーツ分野での両者の交流を示した。そして、日米開戦にいたる時期の日本人による米国での「黒人工作」、戦争中の「人種宣伝」戦、前線での日本人兵と黒人兵との「出会い」などを議論した。

第3部は「米国の日本占領期より20世紀末まで」であり、原爆投下にたいする黒人の反応から論を始めた。占領期のGIと日本人女性との間に生まれた混血児をめぐる問題や、米軍基地に係わる人種問題、米国の公民権運動の日本人への影響、「黒人大学」に学ぶ日本人、黒人音楽・映画・演劇などの受容やスポーツでの交流を論じた。その後、在日アフリカ系アメリカ人の体験を紹介した。さらに、日本人政治家の人種差別発言や日本の戦後小説における黒人像を論じ、日本における関連出版物（歴史・社会・文学など）と研究動向を紹介して本論を締めくくった。

「おわりに——20世紀の省察から21世紀を展望して」では、マーク・トウェインやW・E・B・デュボイスの言葉などを引用しつつ、副題にあるような巨視的な視座から20世紀の人種問題を俯瞰した。そして、「自由の代価は永遠の不寝番なり」という言葉に自由を守る大切さと困難さを思い、「夢見る人」（ドリーマー）であると同時に「夢の番人」（ドリーム・キーパー）であることの大切さを指摘した。

本書には関連年表や英文目次も付した。前者は日本人とアフリカ系アメリカ人との関係史を中心に、日本史・アメリカ史・世界史の事項を示した。今までこうした年表がなかったこともあり、時間をかけて作成したので、その結果30ページにわたるものとなった。後者の英文目次の作成は、アメリカでの調査中に関係者から研究成果を英語で読めるようにしてほしいと何度も言われていたことに端を発する。近い将来、本書を修正して英文版を米国で出版するつもりである。

本書刊行については、幸いいくつかの出版社が関心を寄せてくれた。とりわけ、テーマの意義や21世紀初頭に刊行する意味合いを理解したうえで、「紙幅の制限を設けないので自由に書いてください」と熱意をもって語ってくれたのが明石書店であった。出版事情の厳しいなか、こうした申し出をしてくれたことにたいへん感謝している。

本書で論じることができなかった事項もある。資料がみつからなかったこと、プライバシーの問題で公表できなかったこと、分野が多岐にわたり著者らの理解不足ゆえに書けなかったことなど数多い。たとえば、第1部では、16—17世紀に海外に売られた「日本人奴隷」の問題がある。おそらく、東南アジアやアフリカで日本人奴隷とアフリカ黒人の接触がさまざまな場面で起こっていたであろうが、調査不足でほとんど言及できなかった。（本格的な解明は、世界史の立場からの国際的な共同研究を必要としよう。）第2部では、第二次世界大戦中の前線での日本兵と米軍黒人兵の接触の実情や捕虜の問題がある。日本側の資料不足や「皇軍捕虜」に関する公式記録の欠如など制約も大きく、今後の研究課題として残った。第3部では、米国の電力会社から派遣され日本の原子力発電所で働く「黒人労働者問題」がある。高度放射能を浴びながら被曝した黒人労働者については、人種問題も絡んだ国際問題となるであろうが、現時点では情報収集が困難で不十分な言及にとどまった。

こうした今後の課題も含め、本書では百科事典的扱いになったゆえに掘り下げが足りないテーマもある。きっと犯しているであろう間違い、脱落などを修正するとともに、いずれ21世紀まで踏み込んだ増補改訂版を出版したいと考えている。

古川 哲史（天理大学アメリカス学会会員）

## お知らせ

◇天理大学アメリカス学会は、きたる11月27日(土)12:30から天理大学研究棟で、第9回年次大会を開催します。年次大会当日は、会員総会、研究発表、講演会の順で以下のスケジュールで進行します。

### 記

#### 天理大学アメリカス学会第9回年次大会

と き: 2004年11月27日(土)

と ころ: 天理大学研究棟 第1会議室  
(研究棟3階北側)

会員総会: 12:30

研究発表: 13:00

1) 増崎恒(広島経済大学非常勤講師)

「Stephen Crane のスラム作品とキューバ人——“The Duel That Was Not Fought”に見る帝国主義イデオロギ——」

2) 山田政信(天理教海外部・天理大学非常勤講師)

「ブラジル産プロテスタント教会のグローバルな展開——ユニバーサル教会の世界戦略を事例に——」

記念講演: 午後15:00

梶田英哉(国際交流基金理事・日米センター所長)

「グローバル経済下での日米関係と中南米」

なお第9回年次大会の研究発表・講演には、会員の皆様ばかりでなく、学生や一般の地域住民の方々の来場も歓迎します。入場は無料です。

◇アメリカス学会新入会員

(2004年11月5日現在、敬称略)

一般会員=天野勝範、吉永直道。

### 編集後記

◇巻頭言をいただいた辻豊治氏(京都外国語大学教授)は、ペルーを中心とするアンデス地域社会経済史のスペシャリストである。ラ

テンアメリカを代表する思想家であるホセ・カルロス・マリアテギの思想の多面性を翻訳・紹介した『インディアスと西洋のはざま』(現代企画室)は氏の主要業績のひとつである。辻氏は、また京都ラテンアメリカ研究所の主任研究員でもある。2001年4月に発足した同研究所は、1980年発足のメキシコ研究センターを改組したものであり、『研究所報』および『研究所紀要』の発行、ラテンアメリカにおける言語・文化・歴史・現地事情についての講座や講演会の開催等、活発に活動を行っている。当学会とのさらなる協力関係が期待される。

当学会の年会費は一般会員は、5千円です(入会金はありません)。納入は、郵便局で下記の口座にお振込みお願いいたします。

口座番号: 00900-5-70364

加入者名: 天理大学アメリカス学会

なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口3万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。なお、メールアドレスを変更しましたので、お気をつけください。新アドレスは [tuaas@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:tuaas@sta.tenri-u.ac.jp) です。このアドレスは当学会の英語名称である Tenri University Association of Americas Studies の頭文字をとったものです。

#### 天理大学アメリカス学会ニューズレター

(NO. 51: 2004年11月5日発行)

編集者: 新井 正一郎

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学国際文化学部ヨーロッパ・アメリカ学科内

天理大学アメリカス学会

電話: 0743-63-9076

Fax: 0743-62-1965

e-mail: [tuaas@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:tuaas@sta.tenri-u.ac.jp)

<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/>